

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第4回「江戸時代の牛流通と但馬牛の販路形成（前編）」

現在の但馬家畜市場が今の場所に移転するまでは、養父の町中にありました。その市場は、風土記に麻や桑、材木など様々な産物を商う市場として始まったと書いてありますが、いつの頃からか牛だけを商う市場になったという、江戸時代の養父市場に端を発しています。

1797年に養父市場の由来について書かれた文書には、「養父市場は養父大明神にある市のことで、昔から続いていて、近隣だけでなく遠国の博労も集まって開催されている…」とあり、この頃から既に起源は判らなくなっていました。繁盛していたようです。

この養父市場と大阪天王寺牛町の石橋孫右衛門、豊臣時代から江戸時代の初めにかけて出石を治めた小出家の間には、浅からぬ因縁があります。

聖徳太子の時代、石橋家は四天王寺を建立する材木を運んで来た牛を拝領し、牛飼い場にしたりした所が天王寺牛町（以下「牛町」）となったと言われ、現在の四天王寺西大門前の石鳥居の西南、観音寺の東横丁辺りにあったようです。そして石橋家は聖徳太子の臣、秦川勝から支配免許を受けたことにより、牛町を仕切り、代々孫右衛門を襲名する家となったとされています。

豊臣秀吉は市場経済政策を採り、1584年に牛町を市場として保護し、ここ以外での牛の売買を禁じました。これを執行した代官が小出甚左衛門秀正で、石橋家に伝わる由緒書には、「天正12年(1584年)小出甚左衛門様より牛売買支配の証文頂戴つかまつり…」とあります。

秀正はこの翌年に和泉国岸和田城主になり、長男の小出大和守吉政は1595年に出石城主となって、小出家一族は岸和田と出石を領し、秀吉の政策を進めました。

こんな経緯から、小出家の支援で養父市場が成立したと推測されており、養父市場で取引された但馬牛は牛町を通さずに岸和田に流れたようです。

しかし、これが江戸時代に入って孫右衛門と岸和田の百姓、養父市場の博労が延々と繰り返す紛争のタネになりました。

この紛争を辿ると、牛町を軸とする江戸時代の牛流通システムや養父市場が但馬牛の流通拠点として販路を確立する過程として見えて来ます。

徳川幕府も牛町を保護し、牛町から取引牛1頭あたり銀1匁(1匁^{もんめ}=3.75g)の上納金を取りました。

孫右衛門はその財源として1頭あたり2匁の手数料を取りましたが、1642年に上納金は、牛の頭数に関わらず年銀1貫290匁(1貫^{かん}=3.75kg)に改められました。

ここで江戸時代の通貨について説明します。

江戸時代には、時代劇でお馴染みの小判の他に銀貨と銅貨がありました。小判は金貨で、小判1枚は1両。成人が1食1合の米を消費するとして、約1年分の米消費量に相当する1石(1石^{いし}=約180.390、米の場合は約150kg)の値段が1両と見てよさそうです。

銀貨は貫や匁など重さを単位とする秤量貨幣というもので、1千匁が1貫となります。

また、古典落語「ときうどん」のうどん代は16文ですが、これは1文銅貨16枚で、4千文が1両になります。

このように3種類の貨幣があり、庶民の日常生活は専ら銅貨が使われましたが、大口取引に金貨や銀貨が使われた。

また厄介なことに、金貨は江戸、銀貨は上方で主に使われ、現在の円・ドル為替のような変動相場制だっ

たので一律ではなく、時代によって価値が変わりましたが、概ね金貨1両で銀貨60匁が目安のようです。

ここでお詫びします。前号で周助蔓の始祖牛の購入価格を銀3貫目と書きましたが、諸説比べた結果、2貫750匁というのが正しいようなので、訂正させていただきます。

それにしてもこの値段、牛町の上納金と比べても法外に高いものです。

話を牛町に戻します。

牛町は手数料が設定されたことにより取引頭数が減り、牛取引を一時期中断しました。中断した時期には諸説ありますが、1725年に1頭あたり銀1匁の上納金を納めることで再開しました。

牛町の影響力低下は販路拡張のチャンスでもあり、養父市場の博労は和泉、紀伊、摂津、河内、播磨等に販路を広げ、養父市場は但馬牛の流通拠点として成長しました。

ところが牛町の牛取引が再開すると、博労の自由な取引が阻害され、各地で訴訟騒ぎが起きました。また孫右衛門からすると、お膝下の和泉、紀伊、摂津、河内、播磨に販売ルートを持つ養父市場は見逃せない相手でもありました。（次号につづく）

（前県立農林水産技術総合センター所長）